



静岡地本長が常葉大で防災講義



自衛隊静岡地方協力本部長・宮川知己一等空佐は2月5日(水)、常葉大学草薙キャンパス(静岡市)において「防災行政論」に関する講義を行った。

この講義は、同大学社会環境学部において自然環境や防災に関する知識を深め、将来公務員・教員・企業人となって社会貢献を目指す学生100人に対して実施された。陸・海・空自衛隊の幹部自衛官が、我が国の防衛や災害への対応状況について丁寧に説明した。

宮川地本長は、自衛隊の任務や災害派遣の仕組み、防災への取り組みについて、避難パイロットである自身の経験や、東日本大震災時に隊長として行った人命救助や原発対応の体験を踏まえて、「災害への備えや危機管理は、常に問題認識を持つこと」と啓発した。

続いて、陸上自衛隊第34普通科連隊(御殿場市)重迫中隊長の山下重慶一等陸尉が、県内の災害対応計画を説明したほか、屋外において災害派遣で使用される装備品や車両を紹介。学生たちも災害時に役立つ「止血法」やロープワークの「もやい結び」などを実際に体験し、自衛隊の災害対応ノウハウを学んだ。

次に、海上自衛隊横須賀地方総監部(神奈川県横須賀市)の岳本宏太郎一等海佐が、記憶に新しい台風19号の災害対応について写真を交えて紹介し、「海自は、基地がない県でも目の前に広がる海岸線全てが災害救援の拠点となる」と、海自のオールラウンド性について講義した。

最後に、静岡地本募集課長・山本健太郎二等陸佐が「4年間で身に着けた危機管理の知識を、ぜひ自衛官となって活かしてほしい」と、自衛官の採用について説明。自衛隊のホームページで常に流れている募集動画を使用し、一般人が誤解している自衛隊員の真の姿や日々の生活を伝えるほか、学生の疑問にもその場で答えた。

学生からは「自衛隊の多岐にわたる活動をはじめ、世界で活躍できることを改めて知り、将来の職業としての魅力を強く感じた」「今回学んだ『防災行政論』を通じて、グローバルな視点を持って勉学に励みたい」「ホームページの映像を見て、自衛隊のイメージが変わった」といった声を聞くことができた。

静岡地本は、今後も大学をはじめ教育機関との関係を密に図り、自衛隊の災害対応を積極的に紹介し、学生たちの防災意識の高揚に努めていく。

広報官もステージ上でディスカッション 浜松で防衛セミナー開催



自衛隊静岡地方協力本部(本部長・宮川知己一等空佐)は、2月1日(土)、浜松市福祉交流センターで行われた「第38回防衛セミナー」多彩なフィールドで活躍する若手自衛官たち」を支援した。

このセミナーでは、自衛隊の活動や自衛官の普段の生活について理解を深めてもらうと南関東防衛局(横浜)が主催し、浜松市の後援で実施されたもの。今回は宮川本部長が講演したほか、若手自衛官の出演や航空自衛隊中部航空音楽隊(浜松市)の演奏もあり、幅広い年代の県民が来場した。

宮川本部長は講話で、自衛隊の任務は大きく分けて三つあり、国防、普段から市民生活を守る防災教育や災害派遣活動など、そして世界で困っている人々を助ける国際貢献であることを丁寧に説明。昨今、女性戦闘機パイロットの誕生や、潜水艦での女性乗組員の訓練開始など、ワークライフバランスに関する各種施策の推進により、女性隊員の活躍がますます進んでいることを熱く紹介した。

また、来場者から、自衛官候補生の採用年齢引上げについて「入隊年齢が高いと、若い年齢で入隊する人よりも訓練や任務への適応が難しいのでは」との質問があり、宮川本部長は「体力については段階的に訓練するので全く問題ない。むしろ社会経験豊富なことが人間関係構築をはじめ、さまざまな面において優位だと思っているので、心配せずに入隊してほしい」と語った。

引き続き行われた若手自衛官によるディスカッションでは、静岡地本の星香織3等陸尉と井上龍司2等海曹もステージに登場。星3尉は、熊本地震の際に広報係として現場に派遣され、昼夜を分かたず救援活動に従事する隊員の姿を記録・発信した経緯を紹介。井上2曹は、海中の機雷を除去する「掃海」という海上自衛隊の中でも特に慎重な作業が要求される仕事を紹介し、二人はそれぞれの職種への使命感ややりがいを伝えた。

セミナーの最後には、中部航空音楽隊のメンバーが登場。トランペットやトロンボーン、クラリネットなどの特色を生かした美しい音色で音楽の魅力を存分に伝え、集まった人々の心を魅了していた。

静岡地本は、今後も採用広報活動に加え、部隊や自治体と協力し、自衛官と市民との懸け橋となるよう積極的に活動していく。